

## 座談会

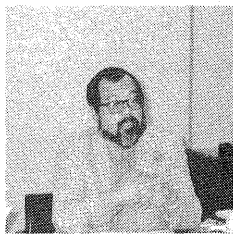
## 体育系高等教育機関の社会的役割

## —生涯スポーツ振興の研究プロジェクト構想—

出席者 江田 昌佑(筑波大学体育専門学群長)  
松浦 義行(筑波大学体育科学系長)  
山川岩之助(筑波大学体育センター長)

司会 高橋 伍郎(筑波大学体育科学系教授)  
松田 義幸(筑波大学体育科学系助教授)

高橋 初めての試みで第10号に座談会を載せたんですが、非常に好評で、体育関係者以外の人にも読んでいただいたり、一般の人たちにも



もおもしろいですねと好評でした。それを受けて、また今回も第11号に向けて企画しました。お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。初めに、山川先生から、この座談会のねらいについてお話をしていただきたいと思います。

山川 お忙しいところありがとうございます。今、司会者からも話がありましたように、昨年、『大学体育研究』第10号で「生涯スポーツ時代に向けての大学体育の役割を語る」ということで座談会を行ったわけですが、そこ

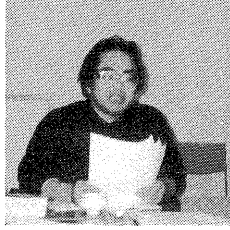


では、生涯スポーツにおいて、特に大学の共通体育をどう改革していくか、その視点として生涯スポーツがあるのではないかと、大学としてはこれから生涯スポーツをどういうふう

に受けとめ、かつカリキュラムをどういうような形で考えていったらいいのかというアウトラインを中心にお話をいただいたわけです。今回はそれを受けまして、やや具体的にといいますか、各論といいますか、そちらの方を少しお話をさせていただけたらと思います。前の号でも申し上げましたが、センターとしましては、これまでの方向ではなくて、幾らかでも改革する方向でカリキュラムを考えていきたいと構想しているものですから、この際、ぜひいろいろご意見を承って、よりよい方向を打ち出していただければと思っています。よろしくお願いいたします。

高橋 司会の進め方ですが、一応4つのパートを考えております。前回と同様、松田先生の方から、例えばパート1でしたら保体審の中間報告の問題点を出していただいて、それについて、それぞれの専門のお立場でお話をいただければと考えています。それではパート1「スポーツ振興の政策課題」ということで、松田先生お願いします。

松田 事前にディスカッションペーパーをお手元にお届けしてありますけれども、簡単に要約をさせていただき、その後ご議論いただければと思います。



ことし4月18日、文部大臣から「21世紀に向けたスポーツの振興について」という諮問を受けて保健体育審議会が開かれています。現在、スポーツ振興5カ年計画を検討しております。そして、早くもこの8月26日に中間報告を出しています。その中で、一番の重要施策として生涯スポーツ振興を非常に強く出しています。この中間報告は全体が3部から成っており、1部がスポーツ振興の意義、2部が我が国スポーツの現状と課題、3部がスポーツ振興方策についてです。イギリス、ドイツ、アメリカ等々のスポーツ振興方策を量的、質的に参考にして、47年に保体審が体育とスポーツの振興のこれからのあり方を示し、今日までそれに従ってきたわけですが、中間報告と昭和47年の答申を比較してみますと、その意義、課題、方策において大きく変化してきています。今回の大幅な変化が、今後、体育系大学のあり方にも大きくかわってくるのではないかと考えられます。そこでパート1でこの問題を取り上げてみたいと思います。47年とこのたびと大きく違う点は何かという点、その意義についてでございます。47年の時点では、言葉が非常にあいまいに使われています。その中で学校体育、社会体育、生涯体育、スポーツ、それらがそれぞれ整理されないで使われているように思います。ところが、このたびの中間答申では2つにきれいに整理しています。1つは生涯スポーツの振興であり、もう1つは競技スポーツの振興です。生涯スポーツの振興が競技スポーツに影響を与え、競技スポーツの振興がまた生涯スポーツの振興に影響を

与える。非常にすっきりしてきております。この点について山川先生は「美術教育、音楽教育といえばそのものの内容がわかるように、スポーツについてもすっきりしてきた。」と言われておりました。そしてこの振興に向けて、方法として2つ考えられております。1つは、生涯スポーツ振興と競技スポーツ振興に向けての学校教育（学校体育）のあり方ということです。2つ目に、国際交流という視点を挙げております。つまり、今回、我が国スポーツの現状と課題として、生涯スポーツ、競技スポーツ、スポーツの学習能力を高める学校教育、国際スポーツ交流、この4つを挙げています。生涯スポーツの分野では、スポーツニーズが多様化し、スポーツの人口が増大してきています。したがって、ハードウェアの面においても、ソフトウェアの面においても、供給システムをいかに整備、充実していくかということが課題だと述べております。その中で、これまでスポーツ・体育の振興というと、パブリックの事業にウエートがかかっていたわけですが、今回はプライベート事業、つまりスポーツ・ビジネスとの調整をいかに図っていくかということも重要な課題だと述べております。競技スポーツの分野では、世界の競技水準の向上に対しては、プロ、アマを含めて、どのようにハードウェア、ソフトウェアの環境を整備、充実すべきかが課題になってきています。次に、学校における両スポーツの振興に向けてのあり方ですが、体育の授業の枠を越えて、いかに青少年のスポーツの生活化を図るか、青少年のライフスタイル全体からアプローチする必要があるということを述べております。こうなると、体育科教育のあり方にも大きな影響を与えてきます。国際交流の分野では、競技スポーツ、生涯スポーツを通じた国際交流の支援システムの充実をいかに図るかを課題としています。47年の答申では、現状から課題に向けて、このたびの中間

答申のように整理されていないという感じがいたします。6・3・3・4教育制度から生涯学習制度へという基本的変換の方向が明示され、その中で生涯スポーツ振興、さらに競技スポーツの振興が入っているわけで、非常に新しい段階を迎えたのだと思います。まさに21世紀に向けての新しい課題が発生してきたと認識しています。ところが次にスポーツの振興方策について見ますと、これから5カ年の間に生涯スポーツの推進、競技スポーツの向上、学校における体育・スポーツの振興、スポーツにおける国際交流の推進について、施策の項目を挙げているだけで、全体がまだ練られておりません。まだ全体が見えていないのだと思います。そこで全体が見えるようなサポートを、私たち自身も保体審以外の世論としてもさらに喚起していく必要があるのではないかと思います。このスポーツ振興方策について見ますと、そう言いながらも、まだまだ供給側の発想で行っており、需要側の視点が欠けています。現在重要になっていることは、スポーツのニーズにいかに対応がこたえるかということで、スポーツの需要構造の把握、スポーツの供給構造の把握、そしてスポーツの需要供給の関連構造の把握ではないかと思うのです。これは学問として見ても新しいテーマで、この問題に体育系大学がどうこたえていくかということも非常に重要な課題だと思います。そこで私たちは生涯スポーツを振興していくに当たっては、理論的な研究課題と、実証的な研究課題と、政策的な研究課題の3つを考えています。こういう課題に対して、どう体育系大学はイノベーションを図っていくか。とても大事なテーマで、体育系大学全体の問題として、筑波大学がリーダーシップをとっていく必要があるのではないのでしょうか。

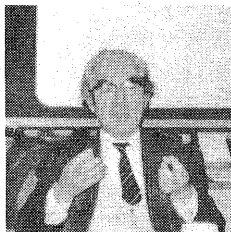
**高橋** パート2、3で、さらに細かく大学の役割とか、6・3・3・4教育のあり方に

関しては取り上げたいと思いますけれども、中間報告の問題点を踏まえた上で、山川先生から一言ずつお話をお願いします。

**山川** 47年にスポーツ振興の基本方針をつくったんですが、私もその一員であったわけです。その違いをさきに幾つか述べていただきましたけれども、あの当時は、生涯スポーツとか生涯教育というのは余りまだ巷間に出てこない、人々の口に乘せられていなかったような時代だったわけです。ただ、あそこで言えるのは、学校体育にも触れておりますけれども、全体としては社会体育の振興だったんですね。市民のスポーツをどう振興していくかという基本方針をうちだしているわけです。したがって、各観点はその辺から言っているわけで、しかも競技力向上は今回のように余り取り上げていない。そこが一番陥没していたわけです。オリンピックで競技力向上をうんとやって、その後の問題だったものですから、むしろ陥没した市民スポーツといえますか、社会体育を大いに振興していこうというのが47年です。今回は社会背景が違うわけですから、生涯問題と競技スポーツと両方取り上げてやっていこうということで、考え方も大分今日的になってきているということだと思います。問題は、生涯スポーツというと、今までは競技スポーツを除いた分野だと考えていた。確かに概念的にはそうなんです。ただ、1人の人を見てみれば、ある時期はオリンピック選手であっても、幼いときと老人になってからは全く生涯スポーツの範疇に入るわけで、これは大に関連して考えなければならぬ問題だと思うわけです。これから生涯スポーツをやっていくには、国側から言えば、どうしても施設設備を整備していく必要がある。この場合に、前は人口幾らにつきスポーツをやる人はどれぐらいだというようなことで想定してやったんですけれども、今後は、さっき松田先生も言ったように、需

要者側のニーズといいますか、どういう形でやるんだというところまで考えて施設設備のことを考えていきませんと、生涯スポーツとはつながらないで、ただお仕着せの、こちらがつくった中でやれという姿になりかねない。したがって、前と違う点は、これからは施設設備を充実するにしても、ただやる場所を整えましたよというんじゃなくて、使う方の要求を大いに出してもらいたいということと指導者の養成が必要です。これも各省から科学的知識に基づいた指導者の要求がなされておるということで、それぞれ政府関係は施策を出して具体的に実行をいたしております。国際交流は、今までオリンピックあるいは世界選手権を中心にして、競技スポーツ関係だけでやられておったんだけど、今度は民間ベースといいますか、選手でない層の国際交流。これは現実には東南アジアからある県のある町に来てサッカーをやっていくとか、そういう具体的な国際交流があるんです。これはオリンピックとはまた違って、相手の文化などを国民的レベルで理解し合える。そういうこともこれからは進めていかなければならない。そうなれば、今後、学校教育の中でそういうことに対応していく教育がだんだんに行われていかなければならないということで、まだ序論の段階のようですけども、前とは相当変わった施策を出そうと。これは1つの方向ですから、今後の具体性を我々は見守るということだと思います。

**松浦** 今度、生涯スポーツの振興が大きな目玉に上がったこと自体は、制度としては新しいでしょうけれども、考えとしてはそれほど新しい



ことではないと僕は思います。ようやく自分で自分を教育するというような姿勢へ、教

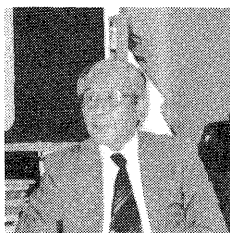
育の方向も、また努力も向けられ始めたのかな、しかも制度として、また行政としてもようやくそこに気がついたのかなというような感じを受けています。私が大学院の学生の頃、石山脩平という教育学の先生が、教育の終局的な目標は、自分で自分を教育することができる能力を養うことだ、習慣を養うことだと主張していたことがございましたけれども、ちょうどそれを教育という言葉を使わずにスポーツという言葉を取り上げて、自分で自分にスポーツを課するんだというような考え方を、はっきりと文部省の行政の柱として挙げたのではないだろうかとは私は思っております。ただ、自分で自分を教育するということは、かつてはそれだけでよかったんでしょうけれども、今は考え方を主張してもだめな時代になってきました。そうなってくると、じゃあその主張を具体的にする方法論を考えようじゃないかという事になったと思います。そういうわけで、先ほど松田先生のご説明にあったような生涯スポーツの推進ということでも、具体的に推進するためには物を考えにゃいかん、物があっただけでもだめだ、物の中にどんなソフトウェアが含まれているのか、対応する人的組織も考えにゃいかん、ところが、人間だけ考えてもだめなので、人間がどんなプログラムを持ってニーズにこたえようとするのか、そういうところまでも考えに入れて、実際に方策を推進させようという意欲に火をつけたような感じがします。今回、保体審の方でこういう答申があったんでしょうけれども、今後、実際に具体化することになると、いよいよもって具体的にスポーツ・運動にかかわっているいろいろな人々が、自分自身の持っている能力、知識を高めるような努力を各人がしなくてはならないことになります。言いかえますと、世の中に必要な事柄すべてが本として出版されているわけではありませんから、どうしてもある教育機関を通してというような努力が必要に

なってくると思います。そういう努力を担うところはどこなのか。恐らく多くの場合、学校であるとか、社会体育の組織であるとか、そういうところが努力を担うことになるだろうと思います。そうなりますと、生涯スポーツの実践が、日本の国民の、または世界の国民の健康に役立つようなところまでいくためには、個々人がどの程度のスポーツをやることによって、どの程度の運動をすることによって自分の健康が維持できるのか、向上できるのか等についての洞察力もまた持たねばならない。ですから、文部省が言ったことは結構なことでしょうけれども、この結構なことを個々人において実現させるためには、大変なカリキュラムが必要だし、大変な人的資源、物的資源が必要です。恐らく今ある物的資源を使ってもできるとは思いますが、残念ですが不十分にしかできないでしょう。物はあっても人間が足りない、ソフトウェアが足りないというような問題を投げかけられたような気がいたします。問題解決の一つとしては、幸いに現在かなり高いレベルの知識を持っている方々がいらっしゃる。そういう人々のセルフエデュケーションを今度は自分自身でしなくてはならない、国民一般のみならず、指導者もまた違った立場で違った勉強を、自分の力をつけるような努力をしなくちゃいけないよということを答申の中で云われているように思います。そういうことから、生涯スポーツの推進は大変重要なことであって、意義のあることだとは思いますが、これを実現するためにはどれだけの努力が要るんだろうか、本当に文部省がそれだけの予算を考慮に入れてこういうことを言い始めたかなというような、ちょっと首をかしげるような点もない訳ではありません。しかし、今後、これはかなり大きな教育目標になってくるだろうと思います。その点から考えると、確かにこの大学では体育の専門課程があるわけですが、より多くのインフルエ

ンスを持っているのは一般体育を担当している部局ではないだろうかと思います。なぜならば、一般体育をとっている学生は、場合によって総理大臣になる可能性があると思います。体育の専門課程を卒業して総理大臣になる確率はより少ないと思います。将来、人間として、より多く社会にインフルエンスを与える者が生涯スポーツを実践できるような人間であってほしい。そういう人間を大学で育てることが、生涯体育、また生涯スポーツの推進のために大きなエネルギーになってくるでしょう。ですから、文部省の方策として出することは出ましたけれども、実際それを担う者はある部局のリーダーかもしれません。そのリーダーが、そして次の世代の者がまた自分で自分にスポーツを課することができるような資質、態度、そんなところに体育の目標の一つが、スポーツの目標の一つが置かれる必要があると思います。競技スポーツの向上ということも確かに重要なことなんでしょうけれども、競技の記録も、1つの文化財として次々と打ち立てられていくことであって、人間の関心事でもあると思います。しかし、やはり一番重要なのは、自分が自分でスポーツをすることなんで、そのスポーツを通して自分の健康を維持増進させることなんだ、体力を高めることなんだ、今回の答申の内容としてはこんなことが最も重要なことではないでしょうか。そのほかのことは、実は生涯スポーツの推進というところにみんな集約される随伴的な条件ではないかという気がいたします。学校における体育・スポーツの振興だって、学校においてスポーツをやってさえおればよろしいというわけではない。学校で学ば育てられたスポーツに対する態度や習慣が生涯スポーツの推進につながらなくてはならないでしょうし、スポーツによる国際交流の推進だって、これまた生涯スポーツの推進のためのエネルギーとしてあるんだろうと思います。ですから、最初に挙がっている生涯スポー

ツの推進ということが、今回の保体審の答申の中では一番重要な項目ではないでしょうか。私は、並列というよりも、むしろ最初の生涯スポーツに最もウエートを置いて考えていきたい。今後、大学におけるカリキュラム等々の考え方もかなり重要視してこれを考慮に入れなくてはいけないんじゃないかなと思っています。

江田 保体審の答申について、松田先生、よく分析くださって、私も大変勉強になったと思っています。脱線するかもしれませんが



もしれませんけれども、臨教審はまことにタイムリーというか、ようやくというか、制度改革までやろうではないかと、在野の人まで呼びかけて、総理大臣が切り出してきた。これは僕は大変な覚醒剤になったと思っています。それを受けた保体審等々が具体的な施策を出していかなくちゃいかんだろうというので今回出てきたわけですが、1つは、我々日本国民全体が健康に関して大変な認識を持ってきたと思うんです。少なくとも戦前、戦時中、あとしばらくは、自分の健康についてもそうそう認識はなかった。ところが、東京オリンピックぐらゐに、日本人が競技の世界で活躍するためには体力をつくらにゃいかんではないかという、体力づくりという1つの国家的な運動が出てきたわけですね。体力づくりはキャンペーンだと私は思っているんです。例えば、指導要領もそうだったし、世の中の動きからみてキャンペーンそのものだった。いいかえれば国家的なキャンペーンだと思っています。ところが、片方でまた医療関係が薬害を提供してきた。公害問題が出てきた。こういうことが多々あるわけですね。そういう問題にかかわることによって、健康に関して日

本人はものすごく真剣になってきたと思うんです。認識の度合いという面からみますと、情報がかなり世の中に氾濫し始めた。健康に関する本とか雑誌がものすごく巷に出るようになってきた。薬害とか公害問題が社会問題になってきたものですから、なおさら健康問題が大きく取り上げられるようになってきた。もう一つ、日本人は急成長的に長寿社会に入ったわけですね。今は高齢化じゃなくて長寿社会なんですね。それだけ長生きしてきておるわけです。そうしますと、必然的に死ぬまで元気にとか、活力ある生活をしなくちゃいかんということになってくる。先進国も生涯スポーツという言葉を使っているかどうかは別にして、長生きする限り元気で活躍できるようにというのは、体育・スポーツの側面だけじゃなくて、我々の生活全体、いえば文化としてとでもいいでしょうか、当然望まれるところであると思っています。ことしの正月、筑波大学で新春放談というのをやりまして、私と医学の先生と学長と3人で放談をしました。いろいろな話が出てきました。私は、筑波大学の体育も古い歴史と伝統を持っておる、その持ち味はあるけれども、現在では目標として大きな柱を立てる必要があるのではないかと思う。私が今率直に考えているのは、1つは競技スポーツの向上にあらう。いわば競技力向上ですね。学群学生なりスポーツに携わる全学の学生についても、競技力向上は1つの柱である。もう一つは、広く多くの人、少なくとも大学の中ですから、若い学生の世代と中高年層の教職員も含めていかに活力のある生活が送れるか。と同時に、世の中にもっと元気で長生きできるようなトータルとしての健康というものの理論と実践を打ち出していけるような母体にならなくてはいかんだろう。そして、2つの柱がお互いにより影響を与えあうよう期待するわけです。この2つの柱を今考えるときではないかという話をしたんです。ちょうど年末に筑波

大学のスポーツ関係のサークルが活躍した直後だったものですから、おめでたい話をというような方向だったんですけど、僕はそういう2つのことを言っていたんです。

当初、松田先生から説明があったように、競技スポーツと生涯スポーツが関係し合っている作用を及ぼすような仕組みを我々は当然考えなくちゃいかんだろう。全く別物であるかないかというのは大変難しいんですが、両方が両方プラスになるような仕組みを考えていく必要があると思っておるんです。少なくともうちの体育専門学群は、歴史的には体育の教員をつくらうという志向でつい最近まできておったはずなんです。ところが、社会的にはだんだんバランスがとれなくなってきたものですから、学生自身が多方面に進出するようになってきた。私はそういう意味でも、生涯スポーツという大きな流れの中に体育の教員も位置づけられるであろうと思っています。例えば、人生80年にしても、学校教育を受けるのはわずかな年数です。7歳ぐらいで学校が始まって、小、中、高、今では6・3・3・4、大学院を出ても25～26まで約20年間なんですね。あとのまだまだ長い将来の年数を当然考えなくてはいけない。学校が1つの素地をつくるかもしれませんが、その後の人生はもっともっと長い。専門学群だったら専門家を養成せざるを得ないんですから、在学しておるだけのところの範疇にとどまるような指導者だけをつくっておれるはずがないんです。だから、将来にわたって、お年寄りまで含めて、その長い過程で通用する指導者を養成していくのが基本になるであろうと皆さんもそう思っていると思います。ただ、残念ながら、現状では個人個人のところで、足元ばかり見てしまって、いわゆるタコつぼ現象になってしまっている部分が見られます。そういうようなことから個人個人が一歩踏み出すべきだろうと思います。もう一つ、日本は物質的に大変豊かなんですね。世紀の

終わりに物質的な豊かさがある国というのは大体混乱するんですね。大きな目で見ると繰り返しかもしれませんが、すべて欧米のまねをする必要はないのではないかと思っているんです。同じ運命をたどるんだったらまねをしてもいいけど、新しい発想で考える必要があるのではないかと。というのは、東洋の文化と西欧の文化は、物事の解決の方法が若干違うんですね。僕はそう感じるんです。したがって、まねるところはまねてもいいけれども、100%まねしないで、みずからつくり出していかざるを得ないであろうという気がしております。だから、生涯スポーツにしろ、競技スポーツにしろ、まねをしないで知恵を絞り合って、新しい構築をすべきではないか。話が飛び飛びになりますが、例えば日本の長寿社会も、今までの世の中の社会構造というのは、大体60年か65年の仕組みでしょう。かつては50歳でご隠居になったんですから。ところが、少なくとも元気な70才ぐらいまでの世の中の仕組み、これは先進国と今まで言われてきたヨーロッパもアメリカもないんです。日本はもう平均寿命が80才になろうとしています。新しくつくらざるを得ないんですね。僕はそう思っています。

**高橋** 今の江田先生の話、かなり現実的に今後の展開にも向けてきておりますし、大学の指導者に関してもちょっとお触れになったんですが、パート2では高等教育機関の社会的役割も含めて、スポーツ振興を考えたときの大学の役割に関して、また松田先生、お願いします。

**松田** これまで長いこと「体育・スポーツの振興」ということで併記してきたわけですが、今回、スポーツを文化としてとらえる。そして体育という概念を教育のベース概念に置きかえているんです。これは非常に画期的なことだと思うんです。これをどうと

らえるかということが次のテーマなんです。体育・スポーツというと、これまで文部省専管だと思ってきたわけです。ところが、いろいろな省庁、いろいろなビジネスが関係するようになってきた。高齢者問題、労働時間短縮問題、レジャー・スポーツ産業問題、リゾート開発問題、自然資源活用問題、国際交流問題、コミュニティー問題、どれをとってみてもスポーツ環境整備、スポーツ事業の推進と深くかかわってきています。ところが、ここで問題なのは、背景にスポーツとは何か、スポーツはいかにあるべきかというものの見方、考え方、感受性を豊かにすることなしに、具体的な種目をとりあげ環境整備をしているのです。今回のリゾート法の内容はその典型だといえます。こういう新しいスポーツ問題に取り組んでいる人たちにもっと理論的な背景が要るんだろうと思うんです。その意味でも、従来の体育・スポーツは文部省の専管、そして体育系大学、その関係ではなくて、社会で起きているスポーツの需要問題にどう体育系大学はこたえていくのか、そういうことまで私たちの世界を広げ深める必要がある。そのために具体的には課題としては3つあるのではないかと思います。「生涯スポーツ振興に向けての研究と教育」「競技スポーツ振興に向けての研究と教育」「学校における体育・スポーツのあり方についての研究と教育」です。この課題に対し既存の諸制度をマイルドにイノベーションを図っていくということでやっていけるのではないかと思います。具体的には生涯スポーツの振興に向けての研究と教育というシステムをつけ加えていくことだと思います。生涯スポーツの振興という色合いで、競技スポーツ、学校体育も見直していくということではないかと思います。まだ生涯スポーツの教育理論—概論、演習、実習ということがない。それをつくる必要がある。それは生涯スポーツのテキストとして必要である。このテキストづくりはス

ポーツ需要構造の把握を前提にして可能なのではない。もう一つは、スポーツマネジメントという分野を新しく起こす必要がある。どういうことか。スポーツ需要構造の把握、スポーツ供給構造の把握、そしてスポーツの需要と供給の関連構造の把握、この3つの研究から成るのがスポーツマネジメントではないかと思います。理論研究における問題を見ますと、先ほどお三方の先生からもありましたけれども、従来のスポーツ振興、体育振興がなぜ定着しなかったかというのは、余りにも体育・スポーツを手段としてとらえ過ぎたからだだと思います。体力づくり手段としての体育・スポーツ、健康維持増進手段としての体育・スポーツのあり方に非常に偏ってきたのではない。次に競技スポーツについても、世界の競技水準が非常に高くなって、まず何をおいてもということで、自然科学的アプローチで競技スポーツの振興を図ってきた。その結果、スポーツが体育の手段となって、人生の目的ということから離れてしまった。今回、生涯スポーツを文化として与えた、スポーツを目的として与えたというところに大きなイノベーションがあるんだろうと思います。そういうふうにして見ますと、これは何もスポーツ教育だけじゃないんですが、音楽教育も美術教育も実技教育に偏り過ぎていたんじゃないか。例えば、スポーツについて、6・3・3・4の中でカバーできる種目は数少ないわけです。スポーツの種類は400を超えるわけです。そうすると、スポーツの分野へいざなうということでは、理論教育を今後重視していかなくてはならないだろう。スポーツの認識、スポーツに対する態度形成、スポーツに対する動機づけ、そして実技教育がくるんだろうと思うんです。そうしてみますと、これからの理論研究の課題として、「スポーツの価値の創造と享受を通じて自己開発のプロセスを動機づける」、「スポーツに対するものの見方、考え方、感受性を豊かにし、



文化としてのスポーツを享受させる、自分のライフステージ、自分の心身の状態に合わせて種目を選択させ、プレー能力の向上を図らせる」、「スポーツ交流を通じて人間関係を豊かにさせる」、こんなことがスポーツ教育のミッションとして出てくるのではないか。そうなりますと、自然科学的な従来の方法に加えて、今後は文化的なアプローチが非常に重要になってくる。これが1つございます。もう一つ、これは他の分野では非常に重要な概念ですが、スポーツ活動の種目の分類がいろんな視点で行われていなければならないんですけれども、これが案外なされていないのが現状です。例えばすぐ実技のダイビングに入っていくとか、種目にすぐ入っていくわけです。そうじゃなくて、例えば海を例にとれば、人間生活と海とのかかわり、海とかかわったスポーツ、オーシャンスポーツの魅力、オーシャンスポーツの分類、その中にヨット、ウインドサーフィン、ダイビング、フィッシング、こういうのが入ってくるわけです。トータルから具体的な種目へ、こういうこともこれから非常に重要になってくる。ところが、47年の答申でも、またこのたびの答申でも、普及振興策としては、具体的な種目、施設がすぐダイレクトに入ってくる。これがまた同じことを繰り返す危険があるのではないかと思います。マネジメント・サイエンスを背景にしてスポーツ・マネジメントということを考えれば、実は生涯学習の一分野として生涯スポーツということが出てきているわけですから、スポーツを文化としてとらえるということでは、他の文化領域との関係ということもきちっと押さえなければなりません。自由時間のニーズにこたえるということは、スポーツの施設だけつくるということではなくて、そのニーズはスポーツに対しても向かうと同時に、音楽に対しても、美術に対しても、文芸に対しても向かうわけです。そういう生涯学習関連の環境をどう整備する

かという広い視点から、次はスポーツの環境整備、そしてスポーツの種目、そういうふうにおろしていかなければならないと思うんです。その視点が抜けていると思います。そういうふうと考えてみますと、今後、我々は大学として、生涯スポーツの理論とスポーツ・マネジメント・サイエンスという2つの問題に取り組んでいく必要があるのではないか。そうしてみますと、マネジメントとしてのハードウェア、ソフトウェア、利用側の価値観、ライフスタイル、レジャー、文化、ニーズ、さらにスポーツ活動種目選好、そういうことにマネジメントのファイナンスの問題、組織論の問題等々出てくるわけですけど、こういう分野は全く手がついていない。図の1、2、3を見ながらまたご議論いただきたいのですが、生涯スポーツの理論ということでは、これまで健康論、体力論からの自然科学的アプローチはあるけれども、これは手段的である。目的としてとらえるならば、レジャー論、プレイ論からスポーツをとらえるということがこれから重要になってくるでしょう。図の2の方では、生涯スポーツ教育の枠組みとしては、スポーツの価値に気づかせる、スポーツへの興味を拡大していく、スポーツの活動プログラムの能力を開発する、スポーツの知識と技術を修得させる、スポーツ生活化、実習に入っていく。そしてスポーツ・アンド・ヒューマン・ビーイングということで、スポーツを通じての幸福の実現になります。そうしてみますと、気づき、態度、構え、動機づけ、知識、技術、さらに人間的なスポーツの享受、自己開発、こういう流れがトータルにまだ扱われてないが、他分野ではこういうふうに扱ってきているので、こういう視点が1つ必要だろう。図の3の方は、生涯スポーツ研究と教育の領域ということで見ると、生涯学習の中にスポーツ学習を入れる。スポーツに対しては自然科学的アプローチに加えて、プレー論、レジャー論、文化論、

さらに保体審で述べている生涯スポーツ、競技スポーツ、学校におけるスポーツ教育、スポーツ国際交流のスポーツ振興の文脈を踏まえたスポーツ享受能力を開発していく。具体的には個人の能力の開発と環境の開発がある。個人の能力の開発には、生涯スポーツ理論、演習、実習がある。そしてハードウェア、ソフトウェアの環境整備と相まって、人々はスポーツ・アンド・ヒューマン・ピーニングという、幸福を増していくことにつながっていく。今後、研究と教育の面で、大学がどういうふうに資源を再配分し、さらに新しい資源を加えてこういう方向をサポートしていくのか、この辺を次にご議論いただきたいと思います。

**高橋** ということで、かなり具体的に話が出てきたわけですが、これを踏まえて、また山川先生。

**山川** スポーツ振興に向けての大学の役割ということで、今も話にありましたが、大学としては教育と研究の2つの面から考えていくことだと思っています。実は、私は今の話とちょっと考え方が違う点があります。レジャー教育あるいは生涯学習の中で生涯スポーツを考えていくんだと。そのことについては、理論的にはおっしゃるとおりですが、しかしながら、生涯スポーツというところに視点を向けた場合には、これを大きくクローズアップしていくという問題なんですね。ですから、文芸なりそれとどういう関係を持たせながらいったらより豊かな生涯スポーツになるかという視点でいかないと、レジャー論とか生涯学習論の中に埋没すれば、スポーツは全くその一部分にすぎないという論理になっていくわけで、どうも専門学群あるいは学部を持つ大学としては議論の展開がやや縮小されるのではなかろうかという懸念を持っています。

教育論の観点からいくと、一般教育と専門教育と両方あるわけですが、松浦先生も言ったように、一般の方ではスポーツを目的として学習して自己実現ができる、スポーツはそういう価値を持っているんだということでこれを理解していくわけです。そのためには、そういう価値を持つように開発されてきたというスポーツのレベルもあるわけですね。ただ遊びのレベルではどうもそこまでいかない。ですから、そういうスポーツの価値を認めて、それを個々の学生が理解できるようにする。それは一般教育の方ですが、専門教育の方からいけば、自然科学系列の研究が多くなったということよりも、むしろ細かく分かれ過ぎているのではないかと。もう少し統合的な側面のものを見方ができないものだろうか。そういう側面も強調される必要がある。そこに文化的な問題も入ってくると思うんです。そういう点で、自然科学系列の中でも、国家的なレベルのスタンダードカリキュラムをつくる場合に一番問題になるのは、発達段階とスポーツ経験がどうかみ合わさっていくのか。この問題はちょっとやそっとでは解決できないと思うんです。相当な知見を得ているわけですが、これは具体的な形でもう少し研究されるべき問題がある。もう一つは精神的な面とスポーツとのかかわり合いの問題。ただ何となく根性ができるとか、そういう経験則でものを言っている面があるので、これなんかもう少し具体的な姿で科学的に把握される必要があるだろう。そういう点で、研究対象の取り方を、微に入り細の方へいく面も必要なんですけど、それだけをやると方向がわからなくなり、部分的な仕組みだけはわかるけれども、全体構造とどういがかかわりがあるのかが忘れ去られてしまう。そういう点で、専門教育としては、これからは現象面と対応できるような研究方向をやっていくことではないか。もう一つは、さっきもカリキュラム委員会に出てきましたけれども、種目に

とらわれた教育を強調していきますと、実際の社会に出た場合に、トータルな問題、スポーツマネジメントにかかわる問題が必ず出てくるわけです。それは対象を見、それにどう対応していくか、資源の配分をどうするか、そういう問題とかかわるわけで、そういう目がありませんと、これからの要求の変化してくる世の中では対応できないんじゃないか。このような専門教育はぜひ充実していく必要があるのではないかと思います。これから変化する世の中に対応していくだけ専門の基礎学力といいますか、こういうものを大学できちっと教育していく。これがなければ、ただ変化に流されていくということだけになる可能性があるようですから、創造的に開発していくためには、専門の基礎学力をきちっと大学ではやるし、またそれを研究できるような体制を今後つくっていく必要があると思っております。

**松浦** 先ほど松田先生の方から、理論的な研究という立場でイントロダクションがあったんですけども、実はスポーツというとなえ方が、必ずしも私は松田先生の意見と一致しないと思います。といいますのは、先ほど、図2のところでも、結局はスポーツというのはスポーツを大切にしたいライフスタイルの形成であって、ライフスタイルの形成をするのは豊かな生活を送るためであってというわけで、結局その手段になっているのではないのでしょうか。もちろん、問題の段階性、ハイレベルキーがありますから、そういう意味ではスポーツは1つの目標にはなると思います。しかしながら、スポーツは1つの目標であるけれども、その目標は異なる目標実現の手段になっています。そういうように考えていく方が、スポーツというものをとらえるときにより適切だろうと思います。なぜならば、人間なんですから。結局、人間が長い寿命を豊かに健康にということになると思います。人

間の生命の尊重という最も基本的な仮説の上から立って、スポーツが人間に役立つような形で人間個々人がスポーツに参加すべきだろうと思います。そういうような意味から考えてみますと、研究の立場から考えれば、人間の運動については、確かに自然科学的なアプローチが多くなされていますし、それから生まれてきた成果も、今日までかなりたくさんあると思います。人文社会科学的な成果と比較するのは大変難しいですけども、毎年出るドクター論文の数なんかと比較してみれば、確かに自然科学的な成果の方が多いだろうということもできるかもしれません。自然科学的なアプローチで、今日まで人間の運動についてたくさんの営みがあります。ありますけれども、わかるところがふえればふえるほど、またわからないところもふえてきたというのが現実の研究のプロセスだろうと思います。恐らく今後、人間の運動・スポーツについて、自然科学的な成果はどんどん上がってくると思います。上がってきますけれども、上がってくると同時に、また自然科学的なアプローチをして解決しておかなくてはいけないことがこれからどんどんふえていく。そういうわけで、人間が世の中に存在している限りにおいては、自然科学的な研究は恐らく絶えることはないでしょう。ただ、自然科学と人文科学、または精神科学の今日までのプロセスを比較してみると、残念ですけども、自然科学的な方がより実用的な価値を持ったものがたくさん生み出されてきました。だものだから、比較してみると、何となく自然科学的な成果が多いという印象を与えるのかもしれませんが。確かに人工衛星等のことを考えれば、自然科学的なアプローチであそこまで人間は行くことができるようになった。人間の心の豊かさがそれに伴って発達してきたか、向上してきたかということ、そうではない。ですから、人文科学的な、または社会科学的な、精神科学的な人間の開発がおくれている

というようなことが今一般的な理解みたいになっているようですけれども、実を言うと、先ほど松田先生がおっしゃったように、文化論的な立場からのスポーツの研究にはやはりそのようなおくれみたいなのがあるのかもしれない。しかしながら、文化論的な立場からのアプローチが今日までなされてこなかったわけではない。しかし、失礼ですけれども、なされてきたのにも関わらず、それがどうしてそれほど大きく評価されていないのかというと、どうしても今までの社会科学の、または人文科学的な、文化論的な立場での結論、成果が実際の価値を持ち得なかった場合が多かった。ところが、自然科学的に生まれてきたものは、キネシオロジーみたいな非常に抽象したものであってさえも、競技に出場しようとする人々は練習の中でそれをアプライしようとする。それだけの実践的な現象に近い結論が出ている。そういうようなことが1つあるのではないのでしょうか。ですから、文化論的に考えることは僕も必要だと思います。どんなに張り切ったって、自然科学的なアプローチをしても、それは現象を分析するにしかすぎない。そして、分析したものも、どんな価値を持っているかを社会的な価値ではかたりするためには文化論的なアプローチがどうしても必要になってくるわけです。自然科学的な尺度を用いている限りにおいては、その科学における尺度による評価はできますけれども、教育的な社会的な成果の価値については、自然科学それ自身が有効な価値尺度を持ち得ないものですから、自然科学の適用によって生み出された成果を異なる価値尺度で計り直す必要があります。そういう点から考えまして、将来は確かに自然科学的なアプローチも必要でしょうし、それがもっと拡大するでしょうが、それに伴って、確かに文化論的なアプローチ及び人文科学的なアプローチにもなお一層の努力が必要になってくる。しかし、将来はそういうぐあ

いに分けられなくなってくるのではないだろうか。スポーツに対して、いろいろな科学的なアプローチがなされるけれども、そのアプローチの具体的な研究方法論ということになってくると、文化論的なアプローチをしようとも、自然科学的なアプローチを借りてこない、実践的な価値に近づくような成果は生まれにくいのではないだろうか。恐らく今日まで、そういうぐあいにいろいろな科学がそれぞれの立場から同じ現象にアプローチして来ました。このことが科学の成果についての比較みたいなのを生み出してしまう。ものだから、どちらかというと文化論的な成果が少ないというような結果を生んでしまっている点があるのではないだろうかと思います。先ほどマネジメント・サイエンスの必要性が出ましたが、確かに僕もそのとおりだと思います。スポーツについてのマネジメント・サイエンスを実際に進めようとするならば、マネジメント・サイエンスと言われている方法論だけでは、恐らく実践的な価値をもった成果を生み出すことは難しいだろうと思います。これには数学的なアプローチも必要でしょうし、統計的なアプローチも必要でしょうし、物理的なアプローチも必要になってきます。それほど、今、1つの現象に対して科学的なアプローチをする場合に、個別科学が持っているユニークな方法なんていうものはなくなってしまっている。どちらかというと、いろいろな研究方法をそれこそインターディシプリナリーにアプライしなくては、1つの現象に対して、1つの固有のサイエンスでさえアプローチすることは難しくなっているというような状況だと思います。そうなりますと、そういうようなことを対象とする高等教育機関ないしは研究機関等では、個々人の先生は自分のテーマを持っているんですけれども、そのテーマについて、いろいろな違ったアプローチの仕方を持っていないと、スポーツというような大変

複雑な現象に対してアプローチすることは難しくなってくる。スポーツというものを対象とする限りにおいては、今までより以上にいろいろなバラエティーのある方法論を、それぞれの教官、研究者が身につけていくことが必要になってくると思います。幸いに最近は何かがそれに変わってくれるような時代に来ていますけれど。

江田 さっきの話にもちょっと関連して話しますと、人間が物質的に豊かな生活をしてきますと、考え方が多様になってくるのではないかと考えています。多様な社会、多様な考え方、個性尊重という話が世に氾濫しています。僕は現実として多様になっていると思っています。そういう時代には文化的な志向がものすごく発展すると思うんです。例えば、スポーツの文化的な意味、あるいは価値という言葉が多く使われだしたのは、日本でも最近ですよ。今、スポーツそのものの文化的な付加価値を多くの人が認める時代に入ってきたと思っています。高等教育に引っかけると言いますと、今の高等教育は昔の旧制大学とは違うわけですね。学生数も違うし教官も違うし、いけば大衆化されました。今、日本の大学、短大は、昔の旧制中学と同じぐらいの数なんです。学生も教員も多様なレベルの合成になってきているわけです。だから、昔のようなエリート集団という部分もばやけてきている。僕はそれが現在だと思っているんです。世の中の多様な価値、そこにまたいろいろなあり方や方法なりが出てくるでしょう。学問的な志向もそういうところでしょう。

今、大学では生涯スポーツをどうとらえようとしているのか。これを教育計画の中でやらなくちゃならないのは体育の土壌なんです。最近の国立大学の概算要求を見ますと、例えば教育学部を半分或は一部を改組して総合課程という形に切りかえてきています。健

康科学課程の中に生涯スポーツコースというのを設定している大学があります。学生はそこでそういう問題について勉強もし、教官の方も研究教育をやっていくんでしょう。スポーツ科学とか生涯教育というのはいくつか出ているんです。たしか4つ、5つありますね。改組の必要があって改組になってきたんでしょうけれども、乗りかえてというんでしょうか、今、現に試行を始めていると考えてもいいのではないかと思います。だから、うちの大学も、特に生涯スポーツに関しては、先駆者たり得るかどうかわかりませんが、私は素直にこれらの問題に関しても力を集める必要があるのではないかと思います。競技スポーツにおいてもそうでしょう。

話は変わりますが、松田先生がここに書かれた図については共感する部分もあります。例えば、図2の生涯スポーツ教育の枠組み。枠組みとしてはこのとおりでしょう。1つの系列ができていますね。ただ、スポーツの価値への接近として、興味を持ってということが現実かどうか？。例えば、教育機関だったらそういうあり方を示すでしょう。しかし、世の中の人々はなんらかのかたちでスポーツを行い、親しみあるいはなじむことによって、個人個人が実体験として認識するのではないかという気がするんです。

話は先ほどの続きですが、いずれにせよ、うちの大学も昔の象牙の塔ではないという認識を改めて持つ必要があるのではないのでしょうか。もっと世の中とドッキングしなくちゃならないでしょう。まさにオーバーラップしている高等教育機関でもあるのですから。昔、産学協同という言葉を慎まなくてはいけなかった時もあったんですが、今、国と大学と世の中また産業界、そこらあたりは多角的に力を寄せ合ってつくり出していく時期に入っていると思います。そういう意味ではうちの大学は開かれていますけど、もっともっと導

き込んでもいいのではないかという気はします。どっちかといいますと、スポーツは象牙の塔にこもっておっては何もできない世界ですから、世の中の動きと手を組まないとだめなんです。かなり政策的な問題がスポーツの現実にはあり得るだろうと思います。

**高橋** 非常にうまく次へ結んでいただきましたけれども……。最後にパート3とパート4を一緒にして松田先生に、最後のまとめの提案をしていただきたいと思います。

**松田** 山川先生が、体育センターとして、また筑波大学として、生涯スポーツの振興のプロジェクトを考えていきたいと前から言われております。来年ということではなくて、生涯スポーツ振興プロジェクトということをして、保体審なら保体審に任せないで、世論形成ということでもやっていく必要があるのではなかろうか。「生涯学習の中に生涯スポーツをいかに位置づけるか」、「生涯スポーツとは何か、またそれはいかにあるべきか」、「ライフサイクルからとらえたスポーツ教育カリキュラム、学習支援システムはいかにあるべきか」、「生涯スポーツ振興のためのハードウェア、ソフトウェアをいかに整備すべきか」、こういう問題に対して3つの視点で研究していく必要があるのではなかろうか。1つは理論研究ということです。大学関係者は教育者である前にまず研究者であるわけで、理論研究をきちっと押さえていく必要があるだろう。これは先ほど松浦先生から、インターディシプリナリーにいろんな分野の知恵の協力を得てやっていく必要があると言われましたけれども、まさにそのとおりだと思います。2番目に、実証研究課題は今度は体育系高等教育機関の教育のあり方になってくるのではないかということです。ここで教える側、教わる側が、生涯スポーツというのをどう受けとめているのか、生涯スポーツの時代の到来を

どのように受けとめているのか、生涯スポーツの振興に向けてどのような研究と教育が必要になってくるのか、生涯スポーツの振興に向けて、研究と教育の両面でいかなるシステムで対応すべきなのか、また、そのときの資源配分をいかに行うか、生涯スポーツの時代に向けて、6・3・3・4の教育システムはいかにイノベーションを図るべきか、こういうようなことを定性的に、また定量的な社会調査において確かめる必要があるのではなかろうか。そして、それらの定性的研究、社会調査の定量的研究のデータを分析し、問題の所在、問題解決の方向を明らかにしながら、次に政策研究課題に向かう必要があるのではなかろうか。政策研究課題では、具体的にどうハード、ソフトの資源を再配分し、また新しくつけ加え、この振興に向けて取り組んでいくか。これには筑波大学体育科学系、体育専門学群、体育センター、大学院が協力し合えば、うちの大学が一番取り組みやすいテーマではなかろうか。体育センターは4年間、生涯スポーツの種目を開設しているわけで、この種目を大学体育の研究と教育のフィールドに使いながら、この問題を取り上げて試してみたらどうだろうか。具体的な生涯スポーツ振興のプロジェクトとしては、理論研究では学際的な視点からメンバーを集めて、専門領域と共通領域の問題を担当してもらって、ペーパーを出してもらいながら、フォーラム形式で研究会を進める必要があるのではないか。研究会でいろんなコメントをいただいたら、それをさらに練り直していく。実証研究では十分なサンプリング調査、ヒヤリングを行って、供給側と需要側の両面からあり方を探る。その結果を、また委員会形式で、政策フォーラムの形でビジョンを収斂するまで委員会を重ねていく。こんなようなことを、これからうちの大学が中心になってやっていくことは非常にいいことではなかろうか。かつ、実は産業界が生涯スポーツにどの

くらいニーズがあるのかということで、筑波大学が夜学をつくるということ大きく発表したことがあります。そこで産業界の事前のヒヤリングをやっていたんです。そうしましたら、理論研究から入ろうじゃないかということで、大手企業が20ぐらい集まっているんです。山川先生にもお願いしましたら、できるだけ筑波の方で研究会を開きながら、産業界のニーズもきちっと把握しながらこの問題をやっていこうではないか、こんな提案も具体的にありました。

**高橋** そうですね。最後、結論的なパートになっていくわけですがけれども、具体的な提案みたいなものがありましたら、なお一層今回の座談会の実がなると思うので、より現実的な実現に向けてのご意見、それから、今、松田先生の言ったことに対してご意見をいただけたらと思います。

**江田** 私もかつて体育センターにかかわっておりましてわかることですが、体育センターはかつてから体育専門学群以外の学生を体育実技を4年間、ほとんどが生涯スポーツという志向で各スポーツ種目でやっておるんです。

少なくともそういう志向をしながらきておったのですが、まことにぴたりとは評価できるところまではきていません。また、総合科目の中ではそういううたい方をはっきりしながら講義をしてくれておったと思います。だから、どっちかといいますと、世の中に生涯スポーツというネーミングが出てくる前に、ここの体育センターの方はそういう志向をしておったという認識を僕は持っているんです。今、お話そのものが、体育の土壌で生涯スポーツに向かったの研究のプロジェクトとか、あるいは研究領域か、あるいは教育領域を持とうではないかという方向だろうと思っています。体育専門学群の将来志向に向

けての特別カリキュラム委員会というのが以前から続いています。今日もその中でいろいろなご意見があったんですけど、もう一歩前進が果たせないんですね。

**高橋** どういうところに問題点があるんでしょうか。

**江田** 例えば、学系があり、専門学群があり、教育組織がある。研究と教育が直接ドッキングするのが望ましいことは当然ですが、研究が進展することによって領域が細分かされた結果、ひずみが生じていることも事実です。研究分野という束ねが、体育学、運動学、体力学、健康教育とある。そこで認知されなければ新しい開設の科目が設定できないという手順になっているんですね。僕は、体育専門学群の開設科目の中には、体育科学系の研究分野にこだわらないで、教員が何人か組んでコアで持ち込むものがあるのもいいのではないかという考えを持っているんですが、手続上はなかなかそれができない。今、とりかろうとしている作業の一つは、ミニマム・エッセンシャルにして、教官も学生ももっとスリムになろうではないかというのが基本的な作業なんです。ところが、そのためにはマンパワーも中身もコアにしないでいかんわけです。そういう作業がどうしてももう一歩前進しないという大変苦しいところがあるのです。しかし、僕は議論を重ねながらもそういう方向に向かないと、一歩脱皮できないであろうという気がしております。

松田先生の最後の方の提案で、1つの方法論を考えてみますと、一番早道は修士課程ではないでしょうかね。本学の修士課程は特別マスターなんです。体育専門学群の上に乗った高度の専門家をつくろうとしています。そこで、マスターの学生の実習は、共通体育の中の生涯スポーツを持ち込む方法を模索してみたらどうでしょう。そうすると実践

的な能力としても高度な専門家が世の中に輩出できるだろうと思うのです。いろいろ議論があるところで、今度の国会で、昼夜開講の有職者教育の修士課程構想がようやく固まってくると思うんですが、こういう構想についても、もっと筋道を立てた形で広く世の中の人を導き入れる方法論が確立していれば、もっといいスタートを起こすのではないかという気はしているんです。マスターの実習は僕は不可能ではないと思っています。そのためには、体育科学系の先生が大いに共通体育にも関与してほしいと思っています。本学は、基本的には専門教育も担当する、一般教育も担当するという教官人事で構成されているんです。だから私は専門だ、私は一般教育だというような完全に区分した仕組みは本学では考えていないのです。時代の流れには、世の中の要求、みずからの要求もあって、何年かおきに何らかのインパクトがあるんですね。僕はそのときにイノベーションを大いに図るべきだろうと思うんです。

**松浦** 研究の立場から考えますと、生涯スポーツを研究のテーマにして、研究のチームをつくってこの研究をプッシュしようというのは、僕は大賛成ですね。ちょうどこのような考えが文部省の方から出てきたところですから、プッシュさえすれば、科研費でも申請すれば容易にくれるかもしれませんよ。生涯スポーツではありませんけれども、特に体力の優劣とか、体力の発達とか、そういう問題についての私の研究の経験で申し上げますと、小学校や中学校の子供たちの中では、我々がこれが体力の向上のために1つの独立変数になっているのかなと思わないようなものでさえ、かなり関与の程度が高いような条件があるんですね。友達の数が多いか少ないかというようなことも、体力の優劣には非常に有意な関連があるんです。こんなことも、3年か4年ほど前に、3年間の一般Bの科学研究

費で文部省に報告したことがありますけれども、生涯スポーツということを考えたら、スポーツの実践を持続させるかのに、関与する条件がいろいろあると思います。同時に、ただ続けるだけじゃなくて、生涯スポーツをやることによって、自分の体力または健康がどれほどまで高いレベルで維持し続けられるのかということが外的基準になると思います。そうすると、恐らく外的基準に対する関連の高い条件というのはたくさんあって、それこそ先ほど松田先生がおっしゃったようないろいろな調査から始まって、実験も含めたような研究をしなくては全部が網羅できないでしょう。ところが、そういうような条件を全部、我々が今知る限りにおいて網羅できたとしても、残念ですけれども、外的基準を説明できないところが残るものです。説明できないところが残ってしまうと、じゃあどんな条件を加えたら説明できないものが説明できるんだらうというぐあいに、問題が問題を生んでいく。目標の段階性ではありませんけれども、問題が問題を生んでいくというぐあいに、恐らく長い間、これについての解決を求めるための営みが続けられねばならないでしょう。21世紀になったら、恐らく条件がまた変わってきますから、同じ研究、同じ方法が違った成果を生むというようなことにつながっていくだろうと思うんです。ですから、そういうような意味で、この大学でリーダーシップをとって、一般Aでも総合Aでもいいから、来年度にでも研究をスタートさせていくということは僕は賛成です。体育科学系の先生だけではなくて、社会工学の先生、経済の先生の知恵もかりてみる。場合によっては、何年か先には、この学校の1つの目玉である特別研究プロジェクトのようなものも文部省に申請することも可能でしょうし、概算要求として出すことも可能だろうと思います。幸いに筑波には優秀なマンパワーはたくさんいると思いますから、そういう先生方の協力を得



て推し進めることは非常にグッドタイミングな問題だろうと思います。

**山川** 1つは、小学校から高等学校までの学校体育におけるスポーツ指導は種目中心でずっと来ていたわけです。大学も観念的には生涯スポーツとは言っても、実際行われているのはその延長線上にあるわけです。ですから、もっと小中の方から生涯スポーツという観点で指導がどう行われていくか……。それによって子供も変わってくるようになってくると思います。

もう一つは、種目をただ教えられて技術がうまくなるというだけではなくて、自分で学んでいくような姿勢を小中高の時代から植えつけていく。大学へ行くと資料がたくさんあって、本当にわからない。どう解決するかというサジェストは先生はやるけれども、あとは、学習支援情報で勉強していくような体制を、理想としては僕は一般体育ではとりたいたいのだと思うんです。健康とか体力というところにだけ価値があったという姿勢だけでは説得できないという状況ですから、もっと教育的に、人間的に何が価値があったかということ、ここで我々は研究として実証していく必要があるということです。そうやるためには、生涯スポーツのコンセプトにしても、余りにもいろいろな考え方があって、一概にこうだと断定するものがないので、十人十色とは言わんけれども、ほぼそれに近い状況なわけです。この点を少しまとめて方向性を明らかにする。もう一つは具体的な方法論と結びついていく。これが重要だと思うんです。この大学の一般体育からいえば、もっとスポーツをくくって、野外系列というか、水辺というか、海洋スポーツ、そういうものから学生の個性を見て選べるとか、ボール系統でも2つぐらいに分けて、これからまたセクションして、個性をそこで実現していくというカリキュラムであってほしいわけです。そ

うなると、中身や先生の配置もいろいろ変わってくるでしょう。したがって、一挙に実現するというわけにはいきませんけれども、徐々にそういう体制をつくっていく。それにしても、もっと学生のニーズ、環境状況、ハードウェア、ソフトの問題、これらの問題をどういうふうに提示していけばいいのか。これを広い研究の体制の中で明らかにしていくということが学生の教育にとっても大変役立つのではないか。この研究はこれから大いに推進したいと考えています。

**江田** 例えば体育の専門学群でも、マスターでも、ドクターでもそうだろうと思うんですが、今、国の施策として生涯スポーツなり競技スポーツの振興を図ろうと言っているわけですね。そうしますと、そういう専門的な勉強をして世の中に出たいと言って学生が来るわけです。これはまことにニーズなんです。それにこたえるべく我々は組織を構えているわけですから、僕は早く受け皿をつくっていかないとニーズにこたえることにはならないと思っているんです。世の中では、指導者がいない、指導者がいないと繰り返し言っています。スポーツに関する指導者の養成の諸機関は、体育の専門コースとか、体育大学とか、体育学部が中心にならざるを得ないわけです。時の流れは1年、2年すぐたつんですから、早くそういう力の合わせ方ができないか、何とかしたいという気持ちですね。私はそういう率直な意見です。

**高橋** 建設的、具体的な提案も含めて非常に有益な座談会であったと思います。私自身も文部省の実技指導者講習会で伝達講習をやるんですが、文部省としては、生涯スポーツとの関連を踏まえて指導してくれというわけです。生涯スポーツとのかかわり合いをきちっと教えてくれというけど、どこをどうとらえたら生涯スポーツとのかかわり合いになるかというのは非常に難しいと思うんです。

そういう時期に、体育センター統計調査研究部会を中心にして、こういう形できちっとスポーツを理論的に整理していくと、少なくとも自分の気持ちの中としては、なるほどスポーツのとらえ方は、生涯にわたってとらえるのであるとか、歴史的、科学的、文化的に見る視点の重要性が認識でき、実技を伝達するのにそう間違いなく伝えられるだろうということがあります。またもう一つ大切なことは、実際に教える指導者や研究者などが、自身もスポーツをやりながら、スポーツのよさ

を感じながら、だからやっぱりいいんだという形で少しずつわいわいくというのが、地に足がついた形でいくのかなんていう感じも持っているわけです。いずれにしても、前回に引き続いてお忙しい中を本当に貴重な御意見をいただきましてありがとうございます。

この座談会は、昭和63年11月30日に、筑波大学体育センター長室において行われたものです。